

はじめりはひとりの漁師の声でした。

昭和38年、弊社は函館ドックの下請工場として、船舶の配電盤、分電盤を製作する

東和電機製作所として創業いたしました。

間もなく、ある漁師の方から、その当時存在しなかった手回しのイカ釣機があればいいのに

という声をお聞きし、それがきっかけとなり

「全自動イカ釣機」の開発がスタートしました。

北海道の技術の世界の海へ――。

東和電機製作所が世界トップシェアを誇る「HAMADE イカ釣機」。北海道の漁師の勘と経験をデジタル化し、マイコン制御によるイカ釣りの自動化を実現しました。現在、その技術は世界へと広がっています。たとえば、お客様の船に同乗しての操作技術の提供はもちろん、多様なニーズに沿った改良・修理など、きめ細かなサポートを行い、大きな信頼を得ています。



HAMADE イカ釣機 EX-2 (国内向けモデル)

株式会社 東和電機製作所

〒040-0077 北海道函館市吉川町 6-29 TEL: 0138-41-4410

<http://www.towa-denki.co.jp/>



支える。助け合う。

〈連載〉

中川 大介／西野 鷹志
庄 司 証

はこだて街なかプロジェクト

米田 哲平／吉村 徳泰
中村 ひでのり



特集

支える。助け合う。

子どもの前では明るくいたいけど
Y・Tさんの場合 p5

ステップファミリーの苦悩
K・Sさんの場合 p6

ちゃんと食べられるように
鈴木 互／学生食糧支援プロジェクト実行委員長 p8

子どもたちの元気をサポート
前田貴子／函館東子どもサポートクラブ代表 p9

留学生に地域の支え
後藤秀史／日本国際語学アカデミー (J-ILA) 函館校 p10

先の見えない日々の中で
グエン・ティ・ジェン・クイン／元北海道教育大学函館校交換留学生 p11

物資・情報・人づくりで地域応援
阿知波健一／函館市社会福祉協議会事業部長 p13

外国人材への支援幅広く
立浪伸一／北海道中小企業家同友会函館支部事務局長 p14

人と水と空と森の話
辰悦丸、東へ 中川大介 p15

はこだて
たてものがたり はこだて街なかプロジェクト p18

連載 米田哲平／吉村徳泰／中村ひでのり p20-21

[ライカはゆく] 特別寄稿／第20話
銀鱗おどる p22
西野鷹志／文・写真

昔の子ども、今どきの子ども
ラジオ体操 庄司 証 p24

H I F インフォメーション I N F O R M A T I O N p25

本誌設置場所
FROM EDITOR・奥付 p26



FROM
EDITOR

「貿易ゲーム」から学ぶこと

国際交流・協力の理解によく使われるワークショップに「貿易ゲーム」がある。

「貿易」を中心に世界経済の動きを擬体験し、さまざまな問題について学び、解決の道について考えることを目的としたシミュレーションゲームだ。世界の国々を四つのタイプ(先進工業国、新興国、資源保有国、後発発展途上国)に分けて、国力を競うものだ。

例えば先進工業国は「技術」や「財力」を、途上国は「資源」を持っている。ゲームにおいて「技術」とはコンパスと定規、分度器、ハサミだ。「財力」はお金、「資源」はコピー用紙。それらは4タイプで不平等に分配されていて、自分たちが持つもので「○、△、□」の正確なパーツを作ってゆく。ハサミやコピー用紙がないなら借りる、買う、何かと交換する、あるいは盗む。

世界はさまざまな競争で成り立っていて、先進国は富を蓄え、途上国は資源をただ同然で搾取されることが分かる。一方で、共に生きてゆこう、助け合ってみんなが生き残る道を考えるというやり方もある。

自分の身の回りでも同じようなことが起きているかもしれない。ちょっと、寄り添い、支援するということを考えてみたい。

(一財)北海道国際交流センター(HIF)
専務理事 池田 誠

3 新世代をつくる つの柱。



運輸

Transport

長年の経験と設備を活かして、お客様からお預かりする大切な積み荷を、心を込めてお運びいたします。

土木

Construction

解体工事や舗装工事・水道工事など、さまざまな大規模工事に、強い「監理力」を発揮しお客様のご要望にお応えします。

事業環境

Environment

これからの地球環境に配慮し、地元のゴミは地元で処理する「ゴミの地産地消」の活動に取り組んでいます。



-SINCE 1977-

株式会社 西武建設運輸

〒041-0803 函館市亀田中野町219番地14

TEL. 0138-47-2738 (代)

<http://www.seibukensetsu.com/>



特集

支える。助け合う。



新型コロナウイルス感染症の世界的流行（パンデミック）が長引き、世界で、日本で、道南で、人びとの暮らしが脅かされている。もちろんそれ以前から、経済的困難や心身の不調に苦しみ、あるいは慣れない外国での暮らしで、支援を必要としている人たちは多い。そうした人たちの小さな声に耳を澄ませ、コロナ禍という大きな困難のなかでも、求める人に手を差し伸べようと立ち上がった人たちがいる。道南での支援の取り組みから、いま何が必要か考えてみたい。

子どもの前では明るくいたいけど

Y・Tさん（40代）の場合



「離婚イコール失敗とか、がまんが足りなかったんじゃないかと言われると、シングルマザーだということを伝えなかつたら良かったなと思っちゃいます」と、苦笑を浮かべるY・Tさん。一人で子育てするようになって5年。仕事から帰って大急ぎで夕飯を作り、3人の子どもを風呂に入れて寝る準備をする。毎日くたくただが、子どもたちの前では明るくしていきたい。だから、周囲のネガティブな言いようが気になるのだ。

結婚を機に北海道へ移り、函館で住むようになった。子育てを本州の実家の親に頼むことはできない。「子育てと仕事の両立には、急に病気になる子どもを見てくれる『病児保育』と

いった制度が使えろといいですけどね。けれども、そうした制度を利用できる場合は身近には見当たらないという。コロナ禍の今は、親しい友人にも頼めない。「でもね、実家が近くにあるからと言って、親が必ず子どもの面倒を見てくれるとは限らない。逆に親子だからうまくいかないことだってある」と気丈に語るYさん。「それよりは困ったときに助けてくださって言える相手がいればいい」

食事の負担大きく

ひとり親が生活していく上で国や自治体の支援制度は大きな意味を持つ。例えば、ひとり親

家庭の18歳までの子に、生活を安定させるために支給される「児童扶養手当」。受給するには、子どもとその親などに所得制限がある。働いて収入を得る場合は、子どもの数によって異なるこの制限額を考慮する必要がある。なかなか悩ましい問題という。「手当てに頼るより、子どものためにできるだけ多く稼ぎたい」と、フルタイムの仕事に就く友人もいます。でも家事をする時間がなくなり、いらいらして子育てに余裕が持てなくなつて、親子関係がギスギスしてしまうこともある。Yさんも子どもたちの進路のために少しでも貯められたらと懸命に働いているが、「大学進学資金には全然足りなくて」と明かす。

コロナ禍で全国の学校が一斉休校となった昨年以降、子どもたちが毎日家にいる家庭の大変さは広く伝えられたが、ひとり親家庭は更に苦しかったようだ。Yさんは低所得世帯を支援する「就学援助制度」で、文房具代や学校給食費の助成を受けている。だが、休校期間中の子どもたちの食費と、それを作る負担はとても大きかった。

「何しろ毎日、3人の子がお昼ご飯を食べるんです。用意するための時間的な負担もそうですが、あつという間にお米がなくなるのはとても不安でした。就学援助を受けても、とても足りなかった」

子どもの学力への不安も小さな。休校中でも自分で積

極的に勉強できる子は問題ないですが、家にいるとついいろいろダラダラしてしまうものでしょう。学習塾に行かせたいけれど、3人もいるとなかなか大変。ひとり親家庭の支援として安価に通える学習塾があったらいいのに」

難しい蓄え

子どもの年齢が上がるにつ

れ、学費、学力、そして子どもたちが巣立った後の自分の老後の暮らしなど「気になることがいっぱいです」とYさんは言う。「自分のためにお金を貯めるなんて、何もできていないから」。精神的に追い詰められ、1週間ほど仕事を休んだこともある。「たまにはカフェでゆっくりしたり、家で本を読んだり、自分の時間が欲しいと思うんです。ダメですかねえ」と訴える。

いろいろな理由があって、一人で子育てをしなくてはいけない状況にある親たち。金銭的な支援や、さまざまな相談に応じるサポート制度はあっても、心を健やかに保つのはなかなか難しい。頑張りすぎたり、虚勢を張ってみたり、子どもの前では弱さは見せられないと自分に気合を入れる日々。そんな時間が続いたら、張り詰めたものが一気に噴き出すこともあるだろう。

「縁もゆかりもない函館で生活と子育てを続けてきましたが、今後のことを考えたら地元に戻ろうかなと真剣に考えています。今まで考えたことはなかったけど、ちょっと疲れちゃったかな」とYさん。少子高齢化と人口減少が進む函館で、宝ともいえる子どもと、その親たちをコロナ禍の中でいかに支えていくか。考えなくてはならない大切な課題だろう。

ステップファミリーの苦悩

K・Sさん●(30代)の場合

「シングルマザーで子どもを育てていた頃、なかなか仕事も見つからず毎日途方に暮れていました。ハローワークに通い、いろいろな企業に応募しても不採用。小さい子どもがいることは

大きなハンデでした。K・Sさんは6年ほど前のことをこう振り返る。その後、事務職での採用が決まったが、子どもの体調悪化で職場も休みがちになり、思ったようには働けなかつ

た。それでも持ち前の責任感で仕事を続け、夜はベッドに倒れこむ日々だった。児童扶養手当や就学援助といった支援を受けつつ暮らしていたが、「給料日近くになると

手持ちの現金がなくなり、同僚にランチに誘われても『お腹すいてないから』と昼ごはんを我慢することもありました。明日のことも考えたくないし、将来のことなど全く考えられない



日々でした」。縁あって2年前に再婚。子どもは小学校に入り、自身の第2子も生まれて落ち着いた新生活が始まったかのように思えた。

届かない支援

少しでも家計を助けようと下の子を保育園に預けてパートの仕事をはじめた時、驚く出来事があった。「共稼ぎで3歳未満の子どもを預けると、パート代がそのまま消えるぐらい保育料が高くて」。函館市では2019年10月以降、3〜5歳児は原則全世帯で保育料が無償化されたが、0〜2歳児は低所得世帯のみ。対象外の世帯は自助努力で何とかしなくてはならない。

再婚した相手方にも子どもがいて、親権者となった元妻側に養育費を払い続けていた。一般に再婚して新たな妻子を扶養する場合、養育費は減額される可能性があるが、Kさんの再婚相

手は前妻との話し合いで減額を認めてもらえなかった。家計には大打撃。生活は楽でないという。「シングルマザーの時は行政のいろいろなサポートに助けられてきましたが、今なかなか受けられる支援はないんですね。民間アパートで暮らしています。が、同じ建物の人から子どもの生活音に苦情を言われ、気持ちには安らがない。子育て世代を優先的に受け入れる市営住宅があったらいいですね」

Kさんの両親は離婚し、函館で独り暮らしをする母親には時折子どもを預かってもらっている。近くにいる分、体調を気遣うこともできる。ただ農村で祖母と暮らす父親にはここ数年、会っていない。以前はわずかなお金を渡したりしていたが、今はその時間的、金銭的余裕がない。

「国の制度に守られている人たちはシングルに支援を受けられるけど、自分のような立場だと

外からはそんなに大変に見えない分、サポートは届きづらいと思います。同じような境遇の人たちはたくさんいて、それぞれがそのことを発信できていない」

取り残さぬよう

今、Kさんには二つの悩みがある。一つは経済的なこと。「コロナ禍になって、あちらこちらで食料支援や寄付の呼びかけが行われていますが、困っていたら誰でも受けられる食料支援のサポートがあったらいい。目に見えない大変さはいろいろなところに隠れているんです」。もう一つは、思春期にある子どものこと。「自分では今まで通リ接しているつもりだけれど、どうしても2歳の子に家族みんなの気持ちが行っているように見えるらしく、家庭での居場所を失い不登校になりがちです。こういう悩みの相談に乗ってくれるところがないんです」

血のつながらない子に「ステップファミリー」ならではの悩みともいえそうだが、Kさんは母親や叔母、そして姉妹を心のよりどころに頑張っている。「何だかんだと言いながら身内だからこそ頼れたり、心の内を明かされたりする。これがなかったら、本当に頭がおかしくなってしまうそう」

今は子育てと仕事で忙しく、悩みはあっても気合で乗り越えている。けれども今後、下の子が受験などでお金が必要になる頃、自分たちの親が介護を必要とする世代になる可能性がある。「本当に先のことを考えるのは嫌になります。どんな人も取り残さない、そんなセーフティネットがあったらいいですね」

国連が掲げる「持続可能な開発目標」(SDGs)は「誰ひとり取り残さない」ことを掲げている。そんな支援を必要としている人は、見えない氷山の下の側にいるのかもしれない。

ちゃんと食べられるように

鈴木 互／学生食糧支援プロジェクト実行委員長

新型コロナウイルスの感染が
拡がり、飲食店で働く大学生た
ちから「アルバイトが減って食
べてゆくのが大変」「3食カッ
プ麺で過ごしている」などと聞

かされた。彼らのために何かし
なくては―それが、「学生食糧
支援プロジェクト実行委員長」
の鈴木互さんが学生への食料支
援に乗り出したきっかけだ。

(上) プースごにさまざまな食材が並ぶ。(下) 袋詰めされた、たくさん夏野菜。



旧知の北海道教育大学函館校
の田中邦明名誉教授からも、学
生たちの苦境を知らされた。
2010年の冬に、路上生活者
支援グループでホームレス支援
に取り組んだことが
ある。リーマンシ
ック後、大手製造会
社による解雇や「雇
い止め」で失業者が
増えたところで、「寒
くないですか。ちゃ
んと食べられてます
か」と相手に寄り添
いながら炊き出し
や、相談にあたった。
その頃と対象は違
うが10月下旬に田中名
誉教授ら市民有志と
ともに実行委をつ

り、大学生に食材を無料で提供
する「食材もってけ市」を始め
ることにした。

同年11月22日に同校で開いた
のを皮切りに、公立はこだて未
来大学、北大水産学部などで開
催。食材は北海道中小企業家同
友会函館支部などに協力を求
め、さまざまな企業・団体から
提供を受けた。「米やパスタ、カ
レール、スープに調味料、野
菜や肉など、いろいろな食材が



すずき 互／函館市根法華地区出身。高
校卒業後、ホテルや税理士事務所で働き、2
006年10月から全日本建設交通一般労働
組合函館支部の職員。

集まりました。生理用品やマス
クもたくさんいただきました」
学生たちからは「いくらでも
持って行ってもいいのが嬉し
かった」「スタッフに声をかけ

られて心が温まった」といった
声が寄せられた。一方で、「ア
ルバイトで行けない日もあり2
日間の開催にしてくれたら」な
どの要望もあった。

「コロナ禍の先が見通せず、今
後も学生たちは収入減を強い
られることを考えると、もってけ
市はまだまだ続けてゆきたい」
と鈴木さん。次回は10月24日10

時半～正午、函館大学で。20
0人分の食材を提供する予定。
詳しくは実行委まで。
☎080・6080・5360



子どもたちの元気をサポート

前田貴子／函館東こどもサポートクラブ代表

ももとは「こども食堂」を
開いて子どもたちをサポートし



ようと集まったメンバーが立ち
上げたのが、函館東こどもサ
ポートクラブ。函館東ライオン
ズクラブの支部活動としてス
タートした。現在は代表の前田
貴子さんをはじめ10人のメン
バーで活動をしている。

最初の活動は2020年7月
に、コロナ禍を受けてひとり親
世帯へ行った食料支援だ。フ
ードバンク道南協議会とタイア
ップして、米や備蓄パン、ス
ープ、みそ汁などのセットを配布し

た。「ひとり親の人は働いてい
ることが多いので、曜日や時間
の設定を変えて3日間、各
100セット配りました。コロ
ナ禍なので車の窓から受け取
れるドライブスルー方式を採用
したんです」と前田さん。果た
してどれだけ参加があるか不安を
感じながらのスタートだった
が、用意した300セットはす
べてなくなり、支援の必要性に
ついて手こたえを得たという。
メンバーはフェイスブックな



前田さん(左から2人目)とサポートク
ラブのメンバーたち。

まえだ・たかこ／兵庫県出身。青年海外協力
隊ではヨルダンで過ごし、結婚を機に函館
に移住。現在、放課後児童クラブ「まねきや」
の職員として活動している。

どで活動状況を発信しながら、ひとり親20世帯への毎月の支援を続けている。「支援するひとり親から、もらっていることを外から見られたくない、車がないので物資を引き取りに行けないという声もある。そこで、サポートクラブのメンバーが手分

けして、支援世帯の自宅まで食材を毎月届けてくれています」函館市内のはこだてこども食堂から米や野菜、菓子、円通寺から供物、JA新はこだてからは米など、多くの人たちが食材を提供してくれている。せたな町の農家から大量の卵をもらっ

た時は、函館短大付設調理製菓専門学校の協力を得て、日持ちするよう700個のマドレーヌを焼いて配った。支援世帯それぞれの事情を考えた丁寧な支援が持ち味だ。

ら、子どもたちを元気づけるようなイベントを開きたい。エネルギーあふれる子どもたちをサポートしたい。サポートクラブのメンバーたちは、それぞれ仕事をしながら、自分の時間を使って「最大限の子ども支援」に情熱を注いでいる。

留学生に地域の支え

後藤秀史 ● 日本国際語学アカデミー (J・ILA) 函館校

日本国際語学アカデミー (J・ILA) 函館校 (函館市湯川町1) は、2013年に開

校した函館唯一の日本語学校だ。運営母体は学生マンションの運営・管理を行う株式会社ジェイ・エス・ビー

で、函館市内では高齢者住宅の運営も行っている。

後藤秀史さんはJ・ILA函館校の事務局で勤務



ごとう・ひでふみ／函館市出身。J・ILAの事務局を担う。不動産会社に勤務後、2016年3月から現職。

「農業や畜産業を営む家庭の学生が多く、送りだけでは生活ができない。なのに新型コロナウイルス感染拡大でアルバイト

先が休業して貴重な収入がなくなり、生活が苦しいという相談がありました。休業補償もバイ



(右・左) 学生たちの農業体験の様子。

ト先によって差があり、異国で暮らす身にとって状況はかなり厳しい」

今春の卒業生は全員、進学が就職が決まったが、卒業まで1〜2年間、本当に苦しい生活を送ってきたという。在学中の学

入がなくなつて仕送りが途絶えたケースもある。そうして学費や寮費の支払が困難となった学生に、学校では面談を重ね改善策を話し合ってきた。

学生たちを支えてくれる地元を取り組みには、感謝の思いが深い。

「開校以来、学校では少しずつですが地域の中でつながりを作ってきました。コロナ禍で苦しむ留学生のためにと、中小企業家同友会といった団体を通じて地元企業などから食料や食事の支援をいただいています。北海道教育大函館校で開かれた『食材もってけ市』を利用して食材をもらった学生もいます。本当にありがたいことで、感謝しています」



先の見えない日々の中で

グエン・ティ・ジェン・クイン ● 元北海道教育大学函館校交換留学生

1年間の函館留学も終わりが迫り、グエン・ティ・ジェン・クイ

ンさんは2020年8月末ごろ、日本からベトナムに帰る航

空券を予約した。ところが、その年2月ごろから流行が拡大し

た新型コロナウイルス感染症で出入国が困難になり、予約便は

運休に。なかなかベトナムに向
かえない日々が続いた。
「留学ビザの有効期限が迫る中
で新しいアルバイトも見つかる

こともできず、お金はどんどん
減っていく。すごく不安な毎日
でした」とクインさん。函館で
買った冬服も7月にはベトナム

大学の授業で「函館」について発表をするクインさん（前列中央）



に送ってしま
まい、心も
体も寒く
なっていた
たという。
大学の事
務局に相談
し、北海道
国際交流セ
ンターでベ
トナム語の
翻訳やイベ
ント運営な
どのアルパ
イトをする
ことに。収
入の支えに
はなった
が、ベトナム
への航空
路線は運休
したまま飛

ぶ様子もない。毎日、インター
ネットで行方状況を確認し、「本
当に帰れるだろうか」と不安が
続いたという。10月には仲間の
留学生は全員いなくなり、他地
域のベトナム留学生と情報交換
を続けたが、全く先が見えない
毎日だった。

そんな時に支えてくれたのが、
シェアハウスに一緒に住んでい
た日本人の友人であり、生活や
食事などのお世話になった近所
の高齢女性だったという。

「友人は、料理を作ってくれた
り、大変だけど心配しないでと
かメールをくれて、すごく嬉し
かった。おばあちゃんも、ご飯
を食べに連れて行ってくれた
り、冬服を買ってくれたりして」
予約便はキャンセルになった
が、なんとか11月のチャーター
便に乗ることができた。ベトナム
入国後にホテルで2週間、自
宅でも2週間の隔離を余儀なく
され、航空運賃や宿泊料の負担
も手痛かったという。

「でも、ようやく帰った自宅で
はフエで有名なしじみご飯を
作って食べて、本当においしく
かった。それと同時に日本でお
世話になった人たちのことも思
い出しました」。異国で生活し
ていれば予期せぬこともある。
ほんのちよとしたサポートも
大きな支えになることを、クイ
ンさんは実感している。



グエン・ティ・ジェン・クイン／ベトナム・フ
エ市出身。2019年10月から1年間、北海
道教育大学函館校の交換留学生として滞
在。現在はベトナム・タナン市で日本の電子
部品メーカー村田製作所の事業所に勤務。

物資・情報・人づくりで地域応援

阿知波健一／函館市社会福祉協議会事業部長



(上) 集まった食材をトラックに積み込む。
(下) 地域交流サロン「ひなたぼっこ」の活動の様子。

北海道社会福祉協議会、北海
道、セブンイレブン・ジャパ
ンの3者は2019年に協定を
結び、セブンイレブンの店舗改
装・閉店時に生じる在庫商品を、
こども食堂など食材を必要とす
るところに届けるプロジェクト
を始めた。函館市社会福祉協
議会は、函館でのこの事業の実務
を担っており、担当部長の阿知

波健一さんは「今年はコロナ禍
で活動できない団体などもあ
り、8団体にジュースや菓子を
配りました」と話す。食材を提
供したこども食堂から、「すご
くありがたい」「持ち帰っても
らう食事にお土産を付けられ
るのが嬉しい」など感謝の声が寄
せられている。児童養護施設や
救護施設、動物愛護団体にも届

け、喜ばれて支援のしがいを感じ
るという。社協では食材支援
だけでなく、情報提供のサポー
トも行っている。例えば函館市
老人クラブ連合会のメンバーか
ら、製作したお手玉を寄付した
いとこの申し出があった。社協の
豊富な人脈や情報を活用して、
日本文化を理解する一助にと留
学生に届けた。

またボランティア人材の養成
にも取り組んでおり、「くらし
のサポーター」養成研修では、
5回の講習でボランティア活動
や認知症サポーターに関する知
識や技術を伝え、グループでさ
まざまなサロンや施設を訪問す
るといった実践活動も行う。「ナ
ルク函館やお茶っ子クラブ、サ
ロンひなたぼっこ、こども食堂
などを訪問し、ボランティアが



あちわけんいち／函館生まれ。東北福祉大
学卒業後、「北一硝子（小樽市）で働き、その
後障がい者施設勤務を経て現職。

現場の実情を間近に見て知る良
い機会になっています」

震災など大きな災害が起きる
と、社協はボランティア活動の
窓口となる。緊急時の拠点であ
り、情報の集約基地だ。「ボラ
ンティアやサポーターになっ
て、社会の役に立つことは生き
がいにもつながるはず。コロナ
禍で人間関係が希薄になりがち
ですが、寄贈されるマスクやタ
オル、現金などを有効活用しな
がら、皆さんの善意に応える活
動を続けたいですね」

外国人材への支援幅広く

立浪伸一／北海道中小企業家同友会函館支部事務局長

約550名の会員を抱える北海道中小企業家同友会函館支部では、よい経営環境をつくることを目的とする「政策委員会」で、外国人の雇用に伴う諸課題



外国人の就労相談。

について話し合っている。人手不足が深刻化する今、中小企業にも外国人は欠かせない戦力だ。「外国人と言えは英会話の講師やガイドと決めつけがちですが、日本人と同じように自分の専門性を活かした仕事に就きたい人が多い」と事務局長の立浪伸一さんは説明する。

政策委員会は外国人の雇用を、人事戦略上の選択肢として取り入れてもらいたい、と考えている。越境eコマースが進む中、「現地の商習慣を理解する外国人材は欠かせない存在だ」ととらえる企業も出てきた。日本で雇用することで、事業内

容や日本の文化を理解した外国人材が、海外進出の際、現地法人の中心として活躍するケースもあるという。

支部では外国人雇用問題に取り組む北海道教育大学函館校の森谷康文准教授と協力し、学生らとともに外国人への雇用意識調査を実施し、相談活動も行っている。「自分の専門性を活かして船の塗装会社に勤めた人もいます。当面の課題は軍事政権の動きに揺れるミャンマーの人たちの就職問題ですね」

故国の動向に不安を募らせるミャンマー人がおかれた状況は、大門横丁で飲食店を経営するジョー・ザウミンさんを通じて入ってくる。函館で仕事があるなら働いてみたいといった相



談もあり、ハローワークなどを通じて仕事を探してもらおうが、生活支援などで側面的なフォローは必要だ。

支部では大学生の食料支援を行う「食材もってけ市」にも協力しており、日本語学校の留学生に食事を提供する会員企業もある。ネットワーク力を生かした外国人材への支援活動は幅広く、支援へのニーズが高まる時代に欠かせない存在だ。

人と水と空と森の話



第二十二話

辰悦丸、東へ

中川大介／人と水研究会

北海道を東西にわかつ脊梁山脈の南端ちかく、日高は襟裳岬のやや西に、様似（さまに）という小さな港町がある。

海岸線にぼつりと浮かぶ火成岩の小島が、砂州で陸とつながった。「エンルム（アイヌ語で岬の意）」と呼ばれるその陸繋島は、砂州とともに「巴」の形にぐりりと内湾をかかえ、東西の風から船を守る。スケールははるかに小さいが、函館によく似た天然の良港である。

その様似の港に、当時の「箱館」を出航した高田屋嘉兵衛の辰悦（しんえつ）丸が入ったのは江戸後期、1799年（寛政11年）の初夏。鎖国下の泰平の世は、ロシアをはじめ外国船の来航に

よって揺すぶられつつあった。

「神々の国」

嘉兵衛は淡路島の百姓の家に生まれ、兵庫へ出て廻船の船頭となり、操船の腕と豪胆さで一代で財を成した。辰悦丸は当時最大級の千五百石積み。その威容が様似の港にあらわれたのである。「箱館はいずれ西の長崎のようになる」とみて造船所をひらくなど、箱館の隆盛の礎を築いた嘉兵衛という人物の肝胆へわけいった司馬遼太郎の長編小説「菜の花の沖」に、辰悦丸の様似入港の場面がある。

「すぐ船からはしけを下ろし、嘉兵衛は乗った。北東の空にピネシリ山というぬきんてた高峰

があり、海岸からその山麓までが平地である。原生林が点在し、川や沼が、銀の象嵌（そうが）んのように冷たく輝いている。

（神々の国だ）

と、嘉兵衛はおもった」

まさしく、様似を含む東蝦夷地、特に内陸は原生の森をアイヌの神々が闊歩する、和人未踏の領域であった。蝦夷地を開拓する意思のとぼしい松前藩は道路をほとんど造らず、人と物資の輸送を海運に依存した。鮭鱒、鮑、昆布など、ゆたかな蝦夷地の産物を港から本州へ送り、蝦夷人（アイヌ民族）を酷使しながら交易で稼ぐだけならそれで十分だったのだ。

それではいかぬ、蝦夷地をひ

PROFILE

岩手県生まれ。新聞記者。カヌーや漂流での釣り好きが高じて人の暮らしと水とのかわりに興味をもち、仲間と「人と水研究会」をつくって、水辺歩きを続けている。

らくには、まず「道」を造らねばならぬ。そう語る幕臣に、嘉兵衛は様似で会ったと「菜の花の沖」にある。最上徳内。出羽国（山形県）の貧農の出ながら算術にすぐれ、医術、地理、天文にも通じて幕臣に取り立てられた小柄な男。18世紀の終わから、幕命で蝦夷地を9回ないし10回も踏査した屈強な北方探検家である。

危険をおかして蝦夷人の小舟に乗り込み、徳内は国後島、択捉島、さらには得撫（うるつぶ）島や樺太まで渡海して、赤人（ロシア人）とも接触した。上役の近藤重蔵とともに択捉島に日本領であることをしめす標柱を立て、千島列島伝いに南下する口

シアの動きと松前藩の無策を幕閣に報告。資源ゆたかな蝦夷地に道を開いて沿岸防備を手厚くし、幕府が直接統治して経済発展させるべきである、と考えたのだった。

函館によく似た地形の横似の港、砂州でつながった小島がエンルム岬。2021年6月



そのための要路のひとつが横似のアポイ岳（810m）山麓であった。人をこばむ断崖が海面から屹立し、太平洋の波濤がうちつける。覚悟をきめ念仏をとえながら登り降りする「念仏坂」を通らねば、クスリ（釧路）、アツケシ（厚岸）、ネモロ（根室）やその先の島々へは達しえないのであった。

徳内は蝦夷地開発を命ぜられ、この危険な海辺を回避する「横似山道」と、近接する「猿留（さるる）山道」の開削を受けもった。

横似山道は延長約7キロ。1799年に蝦夷地初の官営道路として両山道がひらかれて、海の荒れる冬季も東西の往来は安定したのだった。

山中を行くふたつの道は明治以降、海辺に道路がひらかれて廃れたが、横似山道は40年ほどまえ、地元の郷土史研究会が踏査のすえルートを確認した。今も住民が草刈りを続け、フットパス（歩行用の小道）として維

持管理している。

ことしの新緑のころ、横似山道を歩いてみた。急峻な沢地の清流をまたぎ、崖下の紺碧の海を見はるかし、海霧につつまれたエンルム岬を遠望する。この道を徳内が行き、嘉兵衛がおとずれ、測量家の伊能忠敬があるき、探検家の松浦武四郎も通ったのだ。ミスナラの若葉をすかしてそそぐ陽光の下、しばし陶然とした。

脅威に抗して

横似で徳内と会って「道」をひらく意義を説かれた嘉兵衛は、辰悦丸のへさきを東へ向け、厚岸へいたって近藤重蔵と会う。そして、複雑な潮流でおそれられた国後島―択捉島間の「国後水道」をわたって択捉島へ上陸し、日口のせめぎ合いの最前線であるこの島で漁場をひらくようもとめられ、これに応じて別の船でさらに東へと向かうのである。

針は明治政府にひきつがれ、箱館は時代の最先端の港湾都市となりゆくのだった。

新たな道へ

日高山脈が形成されたのは約1300万年まえのこと。ダイナミックな地殻の動きのなかで海側と陸側のプレート（岩板）がこのあたりで衝突し、海側のプレートがめくれあがって隆起した。アポイ岳周辺は深部の硬い岩石が露頭し、独特の生態系が構築されて、2015年にユネスコの「世界ジオパーク」に認定されている。

この峻険の地を、人は懸命に両の脚であるいてきたのである。未知への大いなる好奇心をいだいた「異能の人」が多くいた。徳内しかり、武四郎しかり。商家の隠居の身で天文と測量を学び、全国をあるいて精緻な日本地図を作った忠敬もまた。低い身分から取り立てられた者が少なくないのは、危急に際して慣

嘉兵衛は見事成功し、幕府の御用船頭となり「択捉航路」をひらいて択捉島の産物を流通させるビジネスを開拓する。この「海の道」も、山道すなわち「山の道」も、外国艦船の来航に危機感をつよめ、国際情勢に目をひらき、蝦夷地を開発・防備しようとした幕府官僚の政策から生まれたものであった。

「赤蝦夷」と呼ばれた帝政ロシアはラツコの毛皮をもとめて千島列島を得撫島まで南下、島々を実質支配していった。そのロシアの通商要請を幕府はこばむのだが、一方で松前藩や和人の商人（場所請負人）に搾取されてきた蝦夷人がロシアに懐柔されることをおそれた。1789年には東蝦夷地で蝦夷人の蜂起「クナシリ・メナシの戦い」が起きている。

辰悦丸が横似、厚岸へむかった1799年、幕府は東蝦夷地を松前藩から取り上げ、8年後には西蝦夷地も含め全域を直轄

例にとらわれず人材を登用する幕閣の方針があったのだ。

嘉兵衛も、その系譜のなかにいる。

近代にはいり、蝦夷地は大きくひらかれた。函館は露領・北洋漁業でさかえ、ロシアの領事館が置かれて、つきあうべき隣人ともなったロシアとのかかわりのなかで発展してきた。択捉島には函館から漁業資本が多数進出し、「函館市択捉町」と呼ばれた。辰悦丸が横似を経て向かった海の道を、後の世の人びともたどったのだ。

近世のおわり、新たな道を求めて東へむかった人びとの胸に燃えた火を思いつつ、「ポストコロナ」という未知の時代を生きる私たちがなをなすべきか、深く考えてみるのである。



【引用参考文献】「菜の花の沖」(司馬遼太郎全集 42、44 文藝春秋 1984年)／「最上徳内」(島谷良吉著、日本歴史学会編、1977年)／アポイ岳ジオパークガイドブック(北海道新聞社編、2018年)／横似山道 歴史の道活用整備事業報告書(横似町教育委員会、2017年)



横似山道の沢地を登る。地下深くからめくれあがった硬い岩石が沢を埋めている。2021年6月

領とした。蝦夷人の抑圧を禁じ、「慰撫」につとめ生活を安定させる。こうした政策をすすめた幕臣たちに、蝦夷地のゆたかさとおそろしさ、そこに暮らす蝦夷人の自然観に心動かされていた嘉兵衛はひきつけられる。そして商人ののりを超え、「利」より「義」を重んじて択捉漁場の開拓に乗り出してゆくのである。

「(えい、高田屋などつぶれてもよいわい)」

と、嘉兵衛は肚(はら)のなかに石でも嚙(の)みこんだような苦痛とともに決心した。(自分だけが、他の岸に適(のが)れられない)

それから30年あまりを経た幕末、「黒船来航」の激震に揺れ、幕府はついに鎖国をといて箱館、下田の開港をみとめる条約を米国、ロシアと結んだ。ふたたび蝦夷地を直轄領化し、防備と開発に力を入れはじめる。その方

はこだて たてものがたり

山内一男／NPO法人はこだて街なかプロジェクト



北洋の活気伝えて／小森家住宅店舗（函館市弁天町）

函館山麓から港に至る函館の旧市街・西部地区に、旧函館区公会堂をはじめとする国指定重要文化財の建物と並んで、歴史的町並みを築き上げた市井の人の建物がある。「上下和洋折衷」と呼ばれる独特の建築様式を持つ住宅や店舗である。

1901（明治34）年に建てられた小森家住宅店舗もその一つ。西部地区の建物は1907（明治40）年の大火でほとんど

が灰と化したのが、現在「弁天町」と呼ばれるこの一画だけが火災を免れた。家主の田中仙太郎は、海産商を営みながら奥の2階を貸間としていたという。貸間を有した店舗付き住宅は希である。

1階は大きな船具も搬出入できる「和風荒間硝子入り格子引戸」の店構え。店内からは格子越しに、通りを行きかう人の姿をうかがい知ることができる。

風待ちの港から

火災の多い町ゆえか、屋根は

玄関向かって右側の戸袋に雨戸を納め、左側は帳場。商談は帳場から階段を上った2階の和室で行った。2階の洋風縦長開き窓は港を向いている。商談の客は、和室に洋風窓という時代を先取りしたデザインに目を見張ったことだろう。

瓦屋根。重たげな屋根の軒は、雲形の持ち送りや軒蛇腹のシンブルな小壁で軽やかな表情になる。

田中仙太郎は日本海に面した兵庫県美方郡諸寄（もろよせ）の出身。露領・北洋漁業で好景気に沸く港町函館の活気にひかれて渡って来たのだろう。諸寄は岬がぐるりと内湾を抱え、江戸時代から明治にかけて北前船の「風待ち港」として栄えた港町だ。亡くなった船乗りを供養した寺が港を見下ろし、あらゆる路地は港へとまつすぐつながる。そんな故郷によく似た函館の一角に、田中は土地を購入したのだった。

当時の函館市は人口8万人余。1941（昭和16）年に太平洋戦争開戦で中止されるまで、露領・北洋漁業の一大出漁基地であった。

「田中仙太郎商店」は戦時中の1944（昭和19）年、海軍工事を営む「吉見海事工業」に変

空き部屋を貸間に

わった。所有者の吉見与次郎は、仕事を通して田中の商店と取引があったらしい。吉見夫婦は1階で暮らし、2階では引き続き貸間を営んだ。そこで暮らした中に小森圭一がいた。

小森家は岩手県二戸市北福岡の出である。圭一の父明七は函館へ移住して漁業資材の販売会社勤めた。住まいは現在の堀川町。その後宝来町で「海龍」という旅館を営み、更に弁天町付近で「西浜旅館」を開業した。息子圭一は父を追って函館に渡り、時計店で働いた。やがて弁天町の建物を吉見海事工業から借りて漁業資材や漁網の販売を始め、1950（昭和25）年、小森家はこの建物を買取った。その後、10年間の空白を経て北洋漁業が再開され、函館の町は再び漁業関係者でにぎわい始める。

「忙しくて忙しくて、休みなく夜遅くまで働きました。海のそばなので、上陸した船員が頻繁に店に来ましてね」とキヨは往時の活況を振り返る。小森夫婦は1階で生活し、2階は元の所有者の吉見夫婦。戦後の住宅難の時期であり、小森家もまた空き部屋を貸間とした。

北洋に独航船が出航する時

期、店の前の通りは食材や生活必需品、作業資材などを扱う出店がぎっしりと並んだ。小森家も引戸を開け放って客を迎え入れ、隣の布団店「わたや」は布団の打ち直しに来る船員が引きも切らず。戦災で沈滞した函館のまちは、戦前の北洋漁業の最盛期を上回るほどに活気を取り戻した。雑貨屋、小さな飲み屋、銭湯などの店が立ち並び、路地には長屋が造られ、前浜には釣りをして遊ぶ子供の姿があった。やがて日ソ漁業交渉がその熱

気を冷まし、北洋漁業は終焉を迎え、西部地区の町並みの歴史の針は止まる。高度経済成長、そしてバブル経済の時期も、上下和洋折衷様式の小森家住宅店舗はそのまま残り続けた。現在は古い船の道具を扱うアンティークショップとして、羅針盤や霧笛、舵輪などがひっそりと佇んでいる。（敬称略）

※この連載は、NPO法人はこだて街なかプロジェクトのメンバーが、函館市西部地区の歴史的景観を織りなす民間建築を紹介する企画です。



函館独特の「上下和洋折衷様式」の小森家住宅店舗。店の前の人物の右が小森キヨさん



DATA

建築年／1901（明治34）年
構造／木造2階建て
延べ面積／275.1㎡
様式／上下和洋折衷様式、寄棟瓦葺き屋根、下見板張り外壁

写真／FOLPHOTO 水本健人

「希望のかなた」 (2017年)



監督・脚本 アキ・カウリスマキ
出演 シェルワン・ハジ、サカリ・クオスマネン

世界的なスポーツの祭典が終ったが、現在でもコロナで困窮している人はたくさんいる。映画の世界では、2016年に淵に立つでカンヌ国際映画祭「ある視点」部門審査員賞を受賞した深田晃司監督、今年度のカンヌで「ドライブ・マイ・カー」が脚本賞を受賞した濱口竜介監督の2人が立ち上げた「ミニシアター・エイド基金」が3億円を超える基金を集め、全国のミニシアターに分

配された。世界では支援を求めている難民が数多くおり、武力紛争によって被災した国や地域で生活する子どもたちが約16億人いるという。本作は第67回ベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞したヒューマンドラマだ。シリア人の青年カリードは内戦が激化する故郷を追われ、生き別れた妹を捜すうちにヘルシンキに流れ着く。内戦で全てを失ったカリードにとって、妹を捜し出すことだけが唯一の望み。ヨーロッパ全体を悩ませる難民危機の影響が、無情にも難

民申請を却下され、差別や暴力にさらされるカリードだが、レストランを営むウィクストロムをはじめとする社会の片隅でつましやかに生きる人々の小さな善意が、カリードの願いを叶え、魂を救うこととなる。

PROFILE

アキ・カウリスマキ監督のフィルムへの強いこだわりで、デジタルを一切さず35ミリフィルムで作られた作品である。

濱川市出身。函館における数多くの文化事業や施設・イベントの企画運営に携わる。

音楽の話でもしようじゃないか。

第3回

吉村徳泰
YOSHIMURA 4ベーシスト



とある事情でフテ寝をしていた10代後半の夕暮れ、ふとFMから流れてきて我が心を強く諭してくれたのが、マイルス・デイヴィスのバラード集だった。この作品はこれ以降、現在に至るまで、僕にとってジャズ精神観の指針のような作品となった。

さざ波のような観客の拍手の中、ハービー・ハンコックの極めてリリカルなピアノのイントロから、ゆっくり静かに吹くマイルスの鋭くて切ないトランペット。ロン・カーターのベースは独特の世界観を醸し出し、ほぼドラムを叩かないトニー・ウィリアムスには、前衛音楽家たちもビックリ。その壮絶な緊張感に、奇声を発する観客もいる。

現在はジャズの巨人達である新鋭気鋭の彼らバック陣は、あわよくばフリージャズへ突入しそうになる。しかしサブ的存在のジョージ・コールマンのオーソドックスかつインテリなプレイが程よい鎮静剤となっている。

これぞ絶頂期のマイルス・デイヴィス！といったライブ盤。切なくて人恋しい、哀愁の秋にいかがだろうか。



MY FUNNY VALENTINE
マイルス・デイヴィス (1964年)

PROFILE

函館市生まれ。会社員の傍らジャズベースを基本として道内外のプロミュージシャンと共演する。過去に2度の欧州ツアーも経験。



第4回 / 中村ひでのり (イラスト・文)

正座地獄と、戒名と、天国への階段。

先日父がこの世を去った。享年95才。酒も煙草も好きだったことを考えると長生きをしたと言えるだろう。ただ、コロナ禍の中、春先から入院していた彼を家族が一度も見舞えず、死に目にも会えなかったで、さぞかし寂しかっただろうと思う。

母ももうとくに亡くなっていくし、仲のよかった友人たちもほとんどこの世にはいない。「年齢も年齢だし、ひっそりとやるう」と兄と話し、葬儀には親類などごく少数に声をかけた。

● 昨今、斎場はもちろんお寺でも椅子に座るのが主流のようだが、昔は座布団の上に正座というのが当たり前だった。そしてこれが非常に辛い。うんざりするほど長いお経がようやく終わり、やれやれと立ち上がるうとしてコテン

とひっくり返る人を度々見かけたりする。僕も普段正座なんてすることもないし、加齢と運動不足のせいで膝も弱っているのだが、この度、実家で行った通夜では床に座布団というスタイルだったため、この地獄の苦しみを味わうこととなった。それでも、男たちは胡座になれば多少持ち堪えられるのだが、女性の場合はそうもいかず、相当な苦痛に耐えているのだろうと心から同情した。ウチのカミさんなどは、義父の葬儀ということで周囲の目も意識し、「いい嫁」を演じるため必死で動き回り、その合間に長時間正座もさせられる。心身ともに疲れ果てただろうと考えると、「二、三日は優しくしなきゃ」と思ったりもした。ただ、やって来た住職がまだ若そうなのに、彼だけ椅子に座ってお経を上げていたのはイラ

ついた。が、それに文句をいうほど空気を読めないわけではないのでグツと堪えはした。

● お寺にお金を払って戒名をつけてもらうなんてイヤだと言いつ張り、自分の戒名を勝手に考え、それを生前に墓石に刻む、という快挙を成し遂げ、その数年後に他界した知人がいる。すばらしい。ただ、彼が自分自身につけた戒名もどきは、お寺の住職が付けたものではないので、正式には戒名として認められるものではない。もちろん彼がそれを知らなかったはずはない。現在の「葬式仏教」に対する彼流のささやかな抵抗だったのだろう。彼とはさまざまなことで口論もしたが、この件には拍手を贈りたい。

● お寺と檀家の良好な関係は、信仰心があってこそ成立する。ただ残念ながら、我が中村家の兄弟にはそれがなく、また、お盆でさえ仏壇の扉を開けるのを億劫がつていた父も同じだったと思う。親が亡くなった日に「この字を入れる」と料金表のようなものを突き付けられるのだから悲しいでいる暇もあったものじゃない

い。仏教についての知識なんて皆無の僕が口をだすなど言われそうだが、檀家の虚栄心をくすぐり、支払った金額で戒名に使用する文字や長さが変わり、ランク付けされるといふシステムには、怒りを通り越し、滑稽さを感じる。そう言えば若い頃読んだ本で被差別部落の差別戒名の話を知った時は、誠に気分が悪かった。

● この先、お寺や葬儀に関わる状況がどのようになっていくのかは知らないが、「お寺離れ」がどんどん進んでいくのは間違いないだろう。まあ、戒名はもちろん、葬儀もお墓もいらないと家族に公言している僕には関係のない話ではあるが。

● いつか僕が死んで、あの世というのが本当にあったとする。受付で「あなたは戒名がないので地獄行きです」と言われたら、「ふざけるな！」「と暴れまくり、力づくで天国への階段をスキップしながら登ってやろうと思う。



銀鱗おどる

西野鷹志 / 文・写真

日露戦争が終わった翌年、1906（明治39）年。おたがい見も知らぬ二人の青年が、ロシア沿海州・アムール川河口のブロンゲ岬でめぐりあった。その岬で、北洋サケマス漁業の夜明けを告げる号砲が鳴った。

根っこからの漁師で函館からサケを買いもつて来た平塚常次郎。古着屋稼業に飽きたらず、雑貨商いの糸口をもつて新潟から渡って来た堤清六。

「堤君、こんどの日露戦争でいちばんうれしかったのは、ポーツマス条約で北洋の漁業権が認められたことだよ。……漁師でなければこのうれしさはわからねえ。長年、ロシアの海さ来て、血ば流したおれたちも、これからは、大抵振って、カムチャツカの果てまでのし渡っていいけるんだ！」 『北海の征服者―堤清六』川端克二

函館弁の平塚は、これからはカムチャツカの河口に溢れか



函館の画家・木村捷司の作品「宝寿丸出航」
東カムチャツカ・ウスカムに到着時の光景
平塚常次郎 前列真ん中 堤清六 中央左から2人目
俳優ユル・プリンナーの父親 中央左端

えつてゐるサケの世だよ、と熱弁をふるった。商売感覚がするどい堤もそのとおりだ、と応じた。岬の二坪たらずのムシロ番屋で、三日三晩、ぶつぎりの生サケを肴にウオッカを飲み干す。ふたりは意気投合、東にひろがる曙の空を見あげた。翌年、堤が調達した帆船163トンの宝寿丸は、新潟を出航、函館で資材と漁夫を乗せて東カムチャツカのウスカムに着いた。函館の画家・木村捷司が、このときの情景を描いている。「宝寿丸出航」。帆船を背に堤、平塚ほか13名の乗組員、まさに北洋漁業の先達だ。この絵にひとり外国人の姿がある。ロシア官憲との交渉役に雇われた、ロシアのウラジオストクに生まれた俳優ユル・プリンナーの父親とか。

カム河は、海からサケの大群がつきつきと押しよせ川面が盛りあがって、まさに銀鱗おどる、群来だ！この光景を目の当たりに、俺たちの考えはまちがっていなかった、二人は生涯忘れることのない感激を味わったという。

だが、満載し持ちかえった紅サケは買い叩かれた。そのころ、国内で好まれたのは白サケか、型の大きい銀サケだったのだ。

カムチャツカの良い漁場ほど売れない紅サケがとれる。この窮地を救ったのは、欧米で人気が高い紅鮭缶詰の輸出であった。

この作戦は図に当たり、紅鮭缶詰 DAY BREAK Brand ―あけぼの印の誕生は、日魯漁業、いや、日本の北洋漁業が躍進する礎となった。



旧・日魯漁業函館支社 現・Cafe MARUSEN 漆喰の天井が高い



左 洋風木造3階建て 旧・堤商会 日魯漁業の前身（大正5年築・弁天町）
現・ロマンティコ ロマンティカ

PROFILE

西野鷹志（にしの・たかし） 東京生まれ、函館育ち。タウン誌・街で「ライカは行く」を17年間連載、2012年・147回で終えた。すきなもののフランスパンの皮、ブルゴーニュワイン、ライカM6。

食材を必要な人へ届けるために「にこにこ子ども食堂」

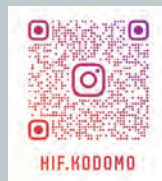
北海道国際交流センター(HIF)が運営する「にこにこ子ども食堂」は、2016年のスタートから現在まで様々な企業や団体、個人の皆様からの食材等の支援によって支えられています。2020年は意識の高まりとともに支援を申し出る企業も増え、また、コロナ禍の中、フードロスが増加した企業などからも多くの食材を提供していただき、北海道内の子ども食堂や困窮するひとり親世帯、外国人など、食材を必要としている方たちへ届ける活動を行いました。今後その動きを更に加速させるべく、北海道の「ロジ拠点」として企業からの食材を受け取り、北海道全域の子ども食堂などに行きわたるシステム「食支援プロジェクト」をスタートします。



「餃子の王将お子さま弁当」の無料配布を行いました！

にこにこ子ども食堂では、こども食堂サポートセンター（運営：一般社団法人全国食支援活動協力会）を通じて、「餃子の王将」を運営する株式会社王将フードサービスより、子どもたちへ「お子さま弁当」を無償で提供していただきました。それに伴い、2021年8月18日(水)～9月12日(日)までの期間（一部日程を除く）、お子様のいる世帯(保護者も含みます)約300世帯へ、各日50食の「餃子お子さま弁当」を配布いたしました。ボリューム満点のお弁当に、子どもたちは大喜び。保護者の方からも「子どもがたたくので、助かりました」「家事や育児、仕事で忙しく食事の準備が大変な時もあるので、とてもありがたい」という声もありました。

今後にもにこにこ子ども食堂では、全国の企業のみならずから提供頂いた食事や食材を、子どもたちやご家庭に届ける活動を継続してゆきます！



【にこにこ子ども食堂】

TEL:0138-22-0770 Mail:kodomo@hif.or.jp

※Instagramもフォローしてください！



(一財)北海道国際交流センター(HIF)
040-0054 函館市元町14-1
TEL 0138-22-0770 FAX 0138-22-0660
E-mail: event@hif.or.jp

<http://www.hif.or.jp>

ラジオ体操

庄司 証／函館圏フリースクールすまいる・代表

昔の子ども、
今どきの子ども



第二十一話

新しい朝が来た♪希望の朝だ♪
清々しい朝だったの、何となく口ずさんでいると、「それ、何の歌？」と子どもたちが聞いてきた。「ラジオ体操の歌だよ」と答えると、「ラジオ体操に歌なんてあるの？」と言われてしまった。確かに大人になって聴いた記憶があまりない。実はこの歌は3代目らしく、年配の方はまた違った歌を覚えていたりもしない。

でもらって、眠い目をこすりながら会場に向かったかつての少年少女は少なくないだろう。「ラジオ体操」は、元々は通信省簡易保険局（現かんぽ生命）の保険加入者増と被保険者の健康の維持増進を目的に、アメリカの生命保険会社の行ったラジオ体操を参考に作ったもので、1928年からラジオの定時番組として放送されている。戦後までは、国民の心身鍛錬促進のために参加が奨励され、学校での開催も求められた。さらに、健康増進だけではなく、次第に集団意識や地域のつながり、国民としての教化する役割を受け持っていくことになった。

だからこそ、ある調査によると、(地域の結びつきの弱い)大都市圏では、徐々にラジオ体操をやらないところが増えているようだ。児童数が多い学校では実施していないところもあるらしく、近年では、騒音の苦情も多く、朝のラジオ体操実施に際して配慮を求める声かけがなされている。子どもがラジオ体操に触れる機会がない。そして、今や、ダンスを取り入れた様々な体操がYouTubeに流れている。ともすれば、「ラジオ」を知らない世代だ。みんな聴くようなラジオは手軽な機器でなくなり、体操は「ラジオ体操」である必要がなくなってきた。

昔は当たり前だった、ラジオ体操があった夏の地域の風景が、失われつつあるのかもしれない。その一方で、前述の調査によると、北海道は小学校での実施率が全国でも高い。授業や行事などでの準備体操として行われていて、子どもたちは、「ラジオ体操」を知っているのだ。そういえば、帰省中には我が子達が祖父母と一緒に体操することもある。世代を超えて共有できるツールもなかなか貴重ではないか。コロナ禍の影響もあって、運動をする機会がなかなか作れない今だからこそ、ラジオ体操はチャンスのはずだ。



PROFILE

七飯町出身。北海道教育大学大学院修了。在学中から「チーフキリスト教学園」の活動に参加し、2012年「函館圏フリースクールすまいる」設立。不登校や若者の居場所支援などを行っている。



毎日の暮らしが、世界との交流の場。

(一財) 共立国際交流奨学財団が管理・運営するつつじヶ丘男子学生会館、相模大野学生会館は、日本人学生・留学生のための学生寮です。日本人学生はもちろん、外国人留学生と生活をともにする中で、互いの理解を深め、友情を築き上げていくことで、国際人としての意識も高まり、学生生活がより豊かなものになることでしょう。

入居者募集中



両館ともに、24時間管理人常駐で食事つき、家具・インターネット完備で、初めての一人暮らしでも安心してご利用できます。

一般財団法人 共立国際交流奨学財団



〒101-0021
東京都千代田区外神田 2-17-3 アヤベビル4F
TEL. 03-5295-0205 平日 9:00~17:30
www.kif-org.com



アジア諸国からの前途有為な留学生に、いささかなりとも奨学援助の手を差し伸べることを決意し、国際友好親善ならびに明日のアジアを建設する原動力となるべく、人材の育成を目的とする。



季刊 [アット・エイチ]
@h
AUTUMN 2021

●発行人
池田 誠 (HIF)

●編集人
中村ひでのり

●編集スタッフ
吉村美悠

●デザイン
中村事務所

●撮影
saeru

●イラストレーション
中村ひでのり (表紙・本文)

●サポーター会員 (敬称略)
稲泉 省 / 鈴木昭次 / 前岡一郎
松本百合 / 川上 納 / 田中真一
山下淳一 / 栗林ゆか / 香内孝之
則竹知子

●連載 & 編集協力 (敬称略)
中川大介
長谷山裕一

●連載 (敬称略)
西野鷹志
庄司 証

米田哲平
吉村徳泰
はこで街なかプロジェクト

次号は
2021年12月31日発行です。

2021年秋号 (年4回発行)

2021年9月30日発行

(一財) 北海道国際交流センター (HIF)

【@h (アット・エイチ)】編集事務局

040-0054 函館市元町14-1

TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660

E-mail volut@hif.or.jp <http://www.hif.or.jp/volut/>

禁・無断転載

【@h】設置場所

【全店配布】ラッキービエロ/ハセガワストア/郵便局 (一部)/生活協同組合コープさっぽろ/みちのく銀行/道南うみ街信用金庫/美容室アイズ

【本町・五稜郭付近エリア】函館市芸術ホール/函館市中央図書館/総合保健センター/北海道新聞社 (道新文化センター)/函館YWCA/レストランバスコ/ワーカースコープ/茜/シネマアイリス/函館市青年センター/北海道教育大学函館校/Colz/Bees.Bee/函館短期大学付設調理製菓専門学校/クラブカットE/喫茶Canvas/夏井珈琲/リュウ/ちいさなしあわせ/パン/G スクエア/Relotta cafe/函館園フリースクールすまいる/中島れんばいふれあいセンター

【函館駅前付近エリア】函館市役所/工房虹と夢/Pizzeria AMORINO/NHK/千歳図書館/サンリフレ函館/函館駅前バス案内/待合所/函館市総合福祉センター/百間/VILLAGE

【美原・本通・中道・桔梗付近エリア】渡島総合振興局/Cafe en/水花月茶寮/ドゥ・アンジュ/花の湯/桔梗配本所 (桔梗母と子の家)/LADIGUE/珈琲物語/チッチョ/バスティッチョ/公立はこで未来大学/文教堂桔梗店/三省堂/タイヤ館/函館本通店/わつとな/ファイヤービット/おしま地域療育センター/スプリングボードユニティ21/ROYAL SKOOL/ばん屋wakka/函館市亀田交流プラザ

【西部地区エリア】北海道国際交流センター (HIF)/Pain屋/ふるる函館/MOSSTREES/金森赤レンガ倉庫/FMいるか/パル・レストラン・ラ・コンチャ/甘味茶房花かんろ/Old Miss 菊/ギャラリ村岡/金子眼鏡店/カフェやまじょう/ロシア極東連邦総合大学函館校/Cafeteria Morie/函館市女性センター/はこで工芸舎/函館市公民館/函館市地域交流まちづくりセンター/ROMANTICO ROMANTICA/Select Coffee Shop Peacepiece/和雑貨いろは/Cafe Classic/箱館元町珈琲店/Cafe & Deli MARUSEN/カフェDici/おひるごはんカフェ taom/SMALL TOWN HOSTEL Hakodate/tombolo

【五稜郭駅・昭和エリア】Beauty Concierge AOKI/港図書館/北海道大学水産学部/函館市亀田青少年会館

【山の手・湯の川・旭岡付近エリア】旭岡図書館/銭亀沢支所/函館市民会館/湯川支所/湯川図書館/函館大学/函館短期大学/函館工業高等専門学校/花園温泉/カット&クリニックたかす

【北斗市エリア】北斗市役所/かなで〜る/LEAVES/しんわの湯/北斗市スポーツセンター/北斗市公民館/久根別荘センター く〜みん/七重浜住民センター れいんぼー/Coing

【七飯・大沼エリア】こなひき小屋/ななえ天然温泉ゆうひの館/七飯町文化センター/大中山コモン/レストランビノ/宮崎鯉屋/南北海道大沼婦人会館/カントリーキッチン/WALD/大沼国際交流プラザ/ネイバル森/foufou/Studio Lumier/七飯町役場/大沼国際セミナーハウス/おおは製パン

いろんなこと、募集しています!

●【@h】はおおぜいの方々のボランティアによって支えられています。安定した運営のため、広告の掲載、または協賛して下さる方 (サポーター会員) を募集しております。年会費は一口、団体/¥10000、個人/¥3000です。みなさんのご理解とご協力、よろしくお願いします。なお、広告の掲載料につきましては事務局までお問合せください。

●編集部では読者のみなさまからのご意見・ご感想、さまざまな情報をお待ちしております。お気軽にお寄せください。ご協力よろしくお願いします。

【@h 編集事務局】

TEL. 0138-22-0770 FAX. 0138-22-0660

E-mail volut@hif.or.jp <http://www.hif.or.jp/volut/>